九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

周豊一より濱一衛・濱ふみ宛書簡7 通(1963年1月6日～1985年9月15日)

李, 麗君
九州大学大学院言語文化研究院

https://hdl.handle.net/2324/1913967

出版情報：“《春水》手稿与日中文学交流 : 周作人、冰心、滨一卫” 国际学术研讨会论文集. 3, pp.10-23, 2018-02-06. 九州大学QR プログラム「人社系アジア研究活性化重点支援」「新資料発見に伴う東アジア文化研究の多角的展開、および国際研究拠点の構築」
バージョン：
権利関係：

周豊一より濱一衛・濱ふみ宛書簡７通
（1963 年 1 月 6 日～1985 年 9 月 15 日）

原文日本語、中国語翻訳：李麗君（九州大学）
書簡所蔵、画像提供：九州大学附属図書館 [1]

1963 年 1 月 6 日　周豊一より濱一衛宛書簡

（書簡一枚目は散佚か）

拝読しています。又目加田誠先生、入矢義高兄等の文章も目を通しているのです。その度に或る感に打たれて昔を偲ばせられて仕舞ふのです。主に大学時代の事で、短暫な浪速高校の生活をも思い出します。三十年程前の事だから夢の様です。

北京は首都でい乍ら、三年の災慌も相当厳重に受けた事だ。でも去年から人民生活が段々よくなって来、「大形【型】好转」とも云ふべきでせう。でも捲タバコの供應はまだ人の意に如らず、月に十位分配されているが、僕の様な「煙突」とあだな付けられた者にはなかなか足る様がないのです。一九六〇年、僕が労働に行った時はタバコの代りに茶葉をパイプに入れて吸っていた位だから、生活上の必需品は食糧が第一位でしたら、タバコが第二位です。

僕は週に一二度日本文を教へています。本館の五六人の外、色々な机关【機関】から有志者が習ひに来るので、二時間と云ふけれど、非常に疲れる。図書館で流通する書物は、中国文は勿論第一位を占め、第二位は日本文書物です。ロシア語より凌駕している位だから、日本文を習ふのも緊要任務です。僕は「光榮的任務」を背負っている譯です。

下手な文筆で失礼しました。先づ御礼を申上るのみ。

御家族皆様へ宜しく

周豊一

六三年一月六日

1963 年 1 月 6 日　周丰一致滨一卫书信

（此信似有一页缺失）

正在奉读。又目加田诚、入矢义高兄等的文章也在拜读。其间感慨万千，往事历历在目。

[1] 7 通の書簡は 2017 年 11 月に濱先生の御息女・藤本康子氏より九州大学附属図書館に寄贈された。这七封信已于 2017 年 11 月由滨先生女儿藤本康子捐赠于九州大学图书馆。

总是回忆起大学时代的事情，有时也会想起短暂的浪速高中时代的生活。因为已经是 30 年前的事了，所以仿佛像做梦一般。

北京虽是首都，却也受到了三年自然灾害的严重影响。但去年人民的生活逐渐变好，应该说形势大有好转。不过香烟的供应还是不尽如人意。一个月十支左右的配给，对于我这样外号叫作“烟筒”的人来说，是怎么都不够的。1960 年我去下放劳动时，用茶叶代替烟叶放在烟管里抽，像我这样嗜烟如命的人，如果说生活必需品第一是粮食的话，那么第二就是香烟了。

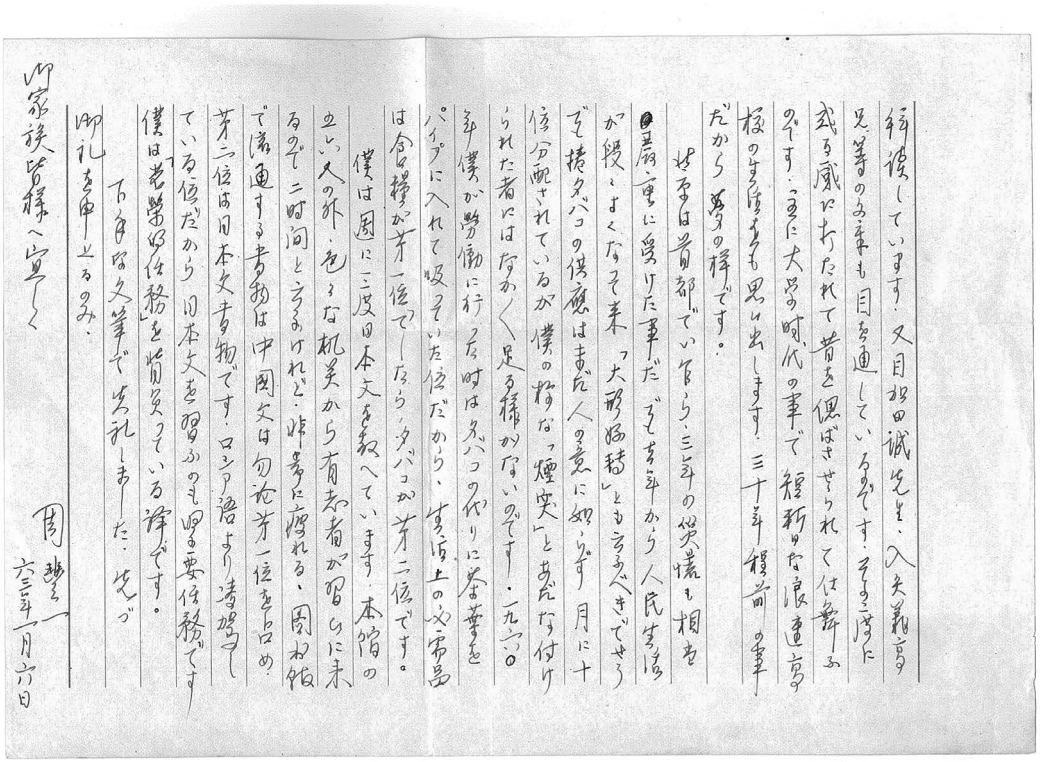
我每星期教一两次日文。除了本馆的五六个人以外，还有来自各个机关的想学日语的人。虽然只是两个小时的课，但还是感到疲惫不堪。图书馆的藏书，数量最多的当然是中文书籍，其次是日文书籍。可见日文的地位已经超过俄文，学习日文也成了紧要任务。所以说我肩负着“光荣任务”。

拙笔见谅。特此致谢!

请代我向您全家表示问候！

周丰一

六三年一月六日



1983 年 4 月 27 日　周豊一より濱一衛宛書簡

春とはいえ、非常にひえます。二十三度より急に十五度までさがり、部屋にいてまたも綿入を身につけなければなりません。二日もつずいて“毛毛雨”です。花も咲いているわけでしょうが、私はなかなかそんな風流心がありませんね。ただ部屋に籠っているわけです。出勤は自らやめてしまいました。恐らくは初夏時分になりますと正式に退休出来ると思っています。大兄は毎日何にをなさっておりますでしょうか。退窟そうではありませんか。

二月二十三日に「憶往」という短文をかいてみました。丁度四十九年前のこの日に小川、桂、目加田、沈令翔諸兄を家で集りました。大兄はその時、私の家に泊っておりますので、當然一緒に夕食を済したわけです。父のその日の日記に、

「……豊一招小川、桂、目加田、濱及沈令翔諸君飯、客多大醉，小川留宿」と書いてありました。私のこの“憶往”は當時のことを思い出して書いたものですが、前翰に已にお知せしましたと思いますけれど、大兄にごらんさせたいと思っています。どこか間違いがあるかどうかを、そして“颱風”に出そうかと思うのです。

しかし、桂さんも同席だったとは少々不思議のように考えますが、別に親しい友柄でもないのに。大兄の思いは如何でしょうか。やはり一緒だったのですか。

入矢義高大兄は大学から停定【年】されたと中島長文さんのお手紙で知りました。大兄より何年か下だったと思います。昔を思い出すと、誠に懐しいことです。

一九八三年

行く春や一人二人と友去りぬ

めでたさは吾が歯の落ちし大晦日

句作をやめて数年、寂しい時やおのずから嘲りたい時など、やはり十七音を綴ってみたくなります。雑念が多いためでしょう。

四月二十七日

浜一衛大兄玉案下

周豊一敬具

1983 年 4 月 27 日　周丰一致滨一卫书信

虽说是春天，但依然是春寒料峭。气温从 23 度骤降至 15 度，在房间里也得穿棉衣。连着下了两天毛毛雨。大概花儿已经开了吧，但我怎么也提不起兴致去赏花。只是闷在家里。我现在班儿也不去上了。大概到了初夏季节就可以正式退休了。兄每日在做些什么？是否觉得无聊？

2 月 23 日我写了一篇短文《忆往》。正好是 49 年前的今天，小川、桂、目加田、沈令翔

诸兄在我家聚会。兄长那时恰巧住在我家，大家自然就一起吃了晚饭。家父在当天的日记里这样写道：“……丰一招小川、桂、目加田、滨及沈令翔诸君饭，客多大醉，小川留宿”。我的这篇《忆往》就是回忆当时的事情，上封信已经跟您提过，想请兄长过目，看看我的记忆是否有误，另外我想投给《飙风》。

其实我跟桂先生的关系并不是很亲近，但是桂先生当时也在场，所以我觉得此事有点不可思议。不知兄长以为如何。或许跟我的想法一样？

中岛长文先生来信说入矢义高兄已经从大学退休了。我记得入矢义高兄比兄长小几岁。想起往事，令人怀念。

一九八三年

匆匆春将归，友人渐离世，寂寞何以堪。

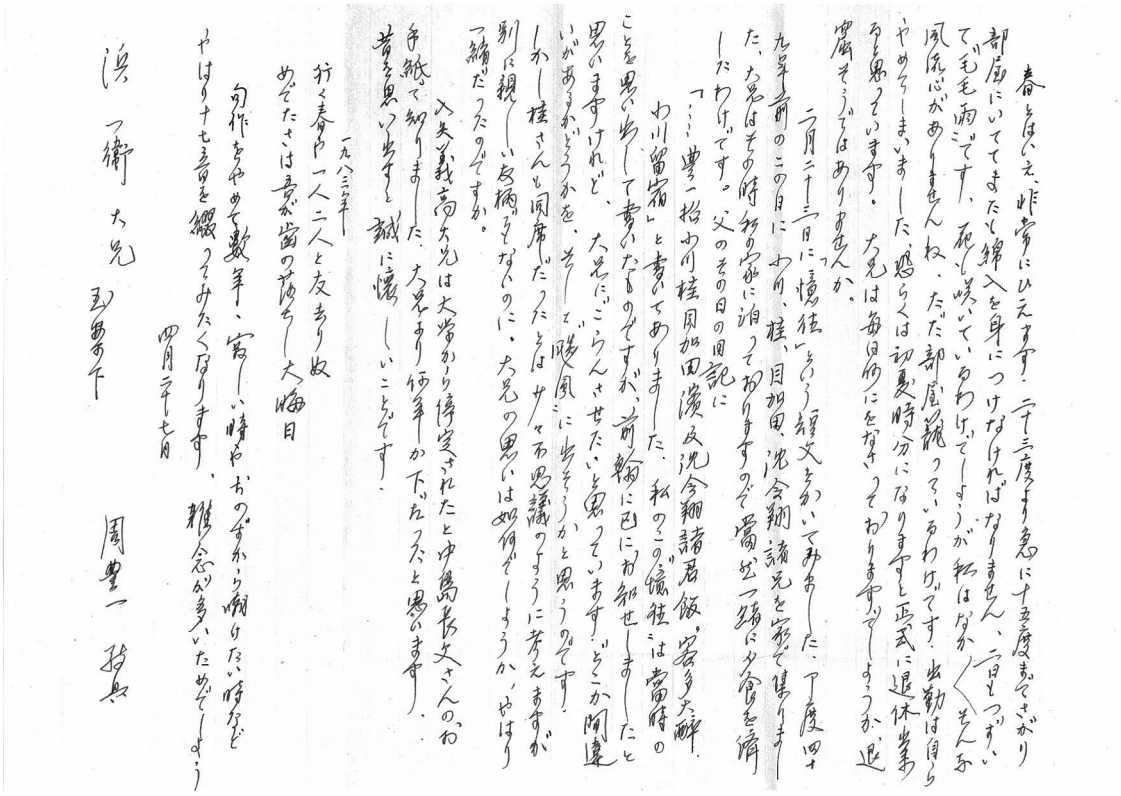
世间除夕佳节,吾齿又没,惟有寂寥,却道又一载。

已经有几年没写俳句了，孤寂时或想自嘲时，还是想作作 17 音。也许是由于杂念太多了吧。

四月二十七日

致 浜一卫兄长足下

周丰一敬上



春とはいえ、昨常にひえます。二十三度より急に十五度まで さがり
部屋にいてもたしか綿入を身につけなければなりません、二日とつづい
て毛毛雨です、花も咲いているわけでしょうが私はなかなか出ません
風流心がありませんね。ただ部屋籠っているわけです。出勤は自ら
やめてしまいました。恐らくは初夏時分になりますと正式に退休業
務を出ています。大兄は毎日何にをなさっておられますでしょうか、退
職そうではありませんか。

二月二十三日に「憶往」という題文をかいてみました。丁度四十
九年前のこの日に小川、桂、目加田、沈令翔諸兄を家で集りま
した。大兄はその時私の家に泊っておりますのでご覧ください。一緒に夕食を済
したわけです。父のその日の日記に
「……豊一招小川桂目加田濱及沈令翔諸君飯，客多大醉，
小川留宿」と書いてあります。私のこの「憶往」は当時の
ことを思い出して書いたものですが、前翰に已にお知せしましたと
思います。けれど、大兄にごらんさせたいと思っています。どこか間違
いがあるかどうかを、また「飛風」に出そうかと思うのです。
しかし桂さんも同席でしたとは少々不思議のように考えますが
別に親しい友柄でなかったのに、大兄の思いは如何でしょうか、やはり
一緒だったのですか。

入矢義高先生は大学から停年されたと中島長文さんのお
手紙で知りました。大兄より何年か下だったと思います。
昔を思い出すと誠に懐しいことです。

一九八三年
行く春や一人二人と友去り
めでたさは喜び留の花ちり大海日
句作をやめて数年、寂しい時やおのずから湧けた時など
やはり十七音を綴ってみたくなります、雑念が多いためでしょう
四月二十七日

浜一衛 大兄 玉案下

周豊一 拝白

1984 年 1 月 16 日　周豊一より濱一衛宛書簡

前略。

“日本の民話”、今日受け取りました。ありがとうございます。大変ご面倒なことでしたと思います。

私は七十二回目の春を迎えております。別によいことがありませんが、とにかく一九八四年になりました。大兄もお達者でおられることと存じます。どうか長寿になって下さい。

大兄の知っておられた私の友人は一人二人と他界に行ってしまいました。沈令揚、令年兄弟、沈令翔君は生きてはいますけれど、人は已にぼんやりになっているという話です。蘇瑞成君は北京大学の私の先輩で、一九七九年肺ガンで倒れた。この蘇君も大兄と面識の人だと思います。

訪日のことは今まで沙汰なしですが、無理にして飛んで行くのが辛い気持ちです。まして行くという考えも薄らいで来たので、大兄の方から訪中しないと再会の機会はむずかしいようです[2]。頑張って下さい。“飈風”第十六期は出版した。お届しませんですか。

一月十六日

濱大兄

周豊一

1984 年 1 月 16 日　周丰一致滨一卫书信

您好！

今天收到了《日本民间故事》，非常感谢！给您添麻烦了。

我已迎来第七十二个春天。虽说没什么特别的好事。但不管怎样已经是一九八四年了。知兄也很健康，企盼您长寿。

兄认识的我的朋友们一个一个都去世了。沈令扬、令年兄弟、沈令翔都还健在，但听说人已经糊涂了。苏瑞成是我北京大学时代的学长，一九七九年患肺癌病倒了。我好像记得兄长也认识这位苏先生。

---

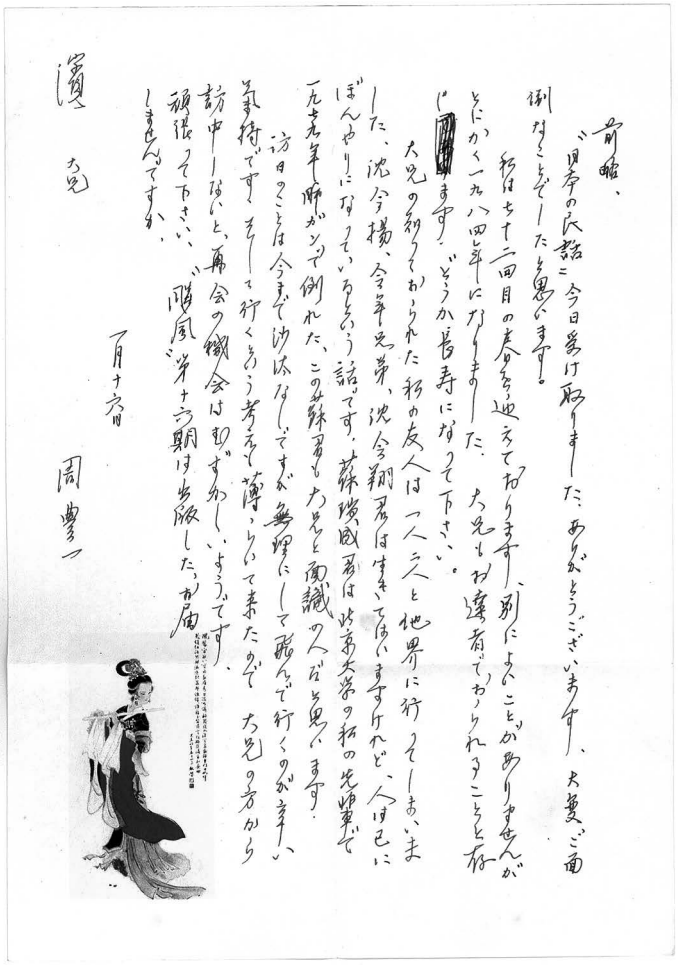
[2] 周豊一「憶往二三事」(『飈風』19, 1987）に、「故友濱一衛氏の軼事一二」という文章を書いている。そこに次のようにいう。「その後（注：文革後)、どうやら生きぬいてきた私のことを悦んでくれて、日本へ来いと熱心に誘ってくれたが、私の方も何にかの機会をねらって北京へ来いと浜兄を誘う。浜兄は集団的にはゆっくり話が出来ないから個人的に自由になる時に行ってみたいという。私は静岡へ行ける可能性があると浜兄に知らせた時、自分の娘は名古屋に居るからそこから静岡へ逢いに行くという返事をくれた。しかし世の中を自己の意志で事を運べるほどの力は持っていないから、とうとう日本行も実現出来なかった。」この文章から見ると、日本行きがかなわなかったのは、申請に対して許可が下りなかったからのようである。

访日之事至今杳无音信，勉强飞去心情也不会好。况且我赴日的想法已经淡化，所以倘若兄不来访华，那我们的重逢看来就难了[3]。望兄努力争取访华。《飙风》第十六期已经出版了。给您寄去吧？

一月十六日

致 浜兄足下

周丰一



[3] 周丰一《忆往二三事》（《飙风》1987 年 19 期）中，著有《故友滨一卫先生轶事一二》一文。文章写道：“从那以后（注：文革后），得知我好不容易活下来，滨一卫先生很是高兴，他热情邀请我去日本，我也邀请滨兄找个机会来北京。滨兄说如果是集体访华则二人无法详谈，所以希望找个机会自己一个人去。当我告诉滨兄我有可能去静冈时，滨兄说他女儿在名古屋，他可以从名古屋去静冈看我。但是，世间的事情并不随人意，最终还是没能实现日本之行。”从这段话来看，日本之行未能如愿可能是由于申请没有批下来。

1984 年 4 月 29 日　周豊一より濱一衛宛書簡

先日差し上げました手紙はお手元にとどけたと思います[4]。今度別に大したことはありませんが、妹静子の訃報をお知らせ致します。

命を奪ったのが、例のガンでした。四月二十六日午后五時ごろに逝去という電報が来た。行年七十歳です。去年十二月初から甥からの手紙で静子がガンにかかったというので、病院は体がたいへん弱っていたし、年も年で手術しても仕様がないというので家へ帰り、日本の梅干しが食べたいという手紙が来て、北京にいる日本の友人や華僑から貰って二度送りました（郵便局の非難さはまた格別でした）。のりも送って上げた。せめてもの慰みでしたが、ガンはひろがり【る】一方だった。苦しみのうち目を閉じたことを思いますと、老いた涙も流れ出してしまいました。でも静子はもう父母など親類と一緒にいるから、生きていた親類たちは可哀相うでならないが、人間はいくら威張っても最後は同じく死の道です。考えるとおかしくなって来ます。

第十七期の「飈風」に何にものせないよう中島先生にお願しましたから、多分そうするかも知れません。何故かといえば毎期に数篇も掲載して読者に文句などいわれては詰らないと思うし、内容から言うと極く一般的なもので、日本の読者層に対してはきいたことのない内容といっても、あまり下手な文字だから耻しく感じて来たのです。しかしまたぽつぽつ書くつもりです。

では、以上をお知らせ申し上げ致します。

四月廿九日

浜大兄

豊一敬具

1984 年 4 月 29 日　周丰一致滨一卫书信

前些日子寄给您的信已经收到了吧！[5]这封信并没有什么重要的事。只是想告诉您舍妹静子去世了。

记得以前跟您说过静子患了癌症的事，正是这病夺走了她的生命。电报上说，她于四月二十六日下午五点左右离世。享年 70 岁。去年十二月初，我外甥来信说静子得了癌症，医院说

---

[4] この書きぶりから、前便の 1984 年 1 月 16 日付け周豊一から濱一衛宛の書簡に対する返信はなかったものと思われる。ご遺族によると、濱先生はこの年の正月頃から病気により口数が少なくなっていたという。

[5] 从这种写法来看，周丰一上一封于 1984 年 1 月 16 日写给滨一卫的信并未收到回信。据滨先生家人说，这一年正月前后滨先生因患病而变得沉默寡言了。

她身体非常虚弱，年纪也大了，无法做手术，所以只能回家静养。外甥说静子想吃日本的梅干，所以我从在京的日本友人和华侨那里弄到梅干，分两次寄给她（此事受到了邮局的严厉批评）。还寄了些紫菜。也算是一点儿慰藉。但癌细胞还是不断地扩散。一想到她是在痛苦中闭上眼的，我就禁不住老泪纵横。静子已经跟父母等亲人在一起了，而活着的亲人们实在太悲凄了。人在世时无论多威风，最后都要走向死亡。一想到人生苦短，禁不住方寸大乱。

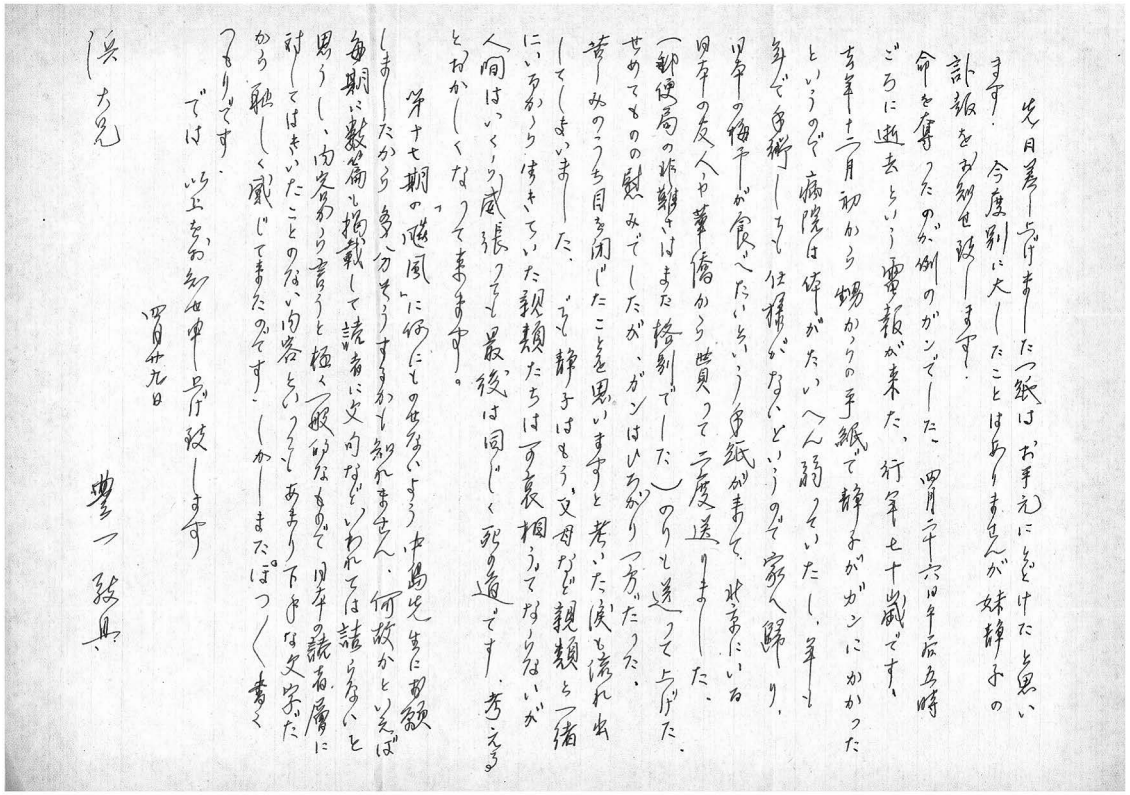
我已经拜托中岛先生第十七期《飒风》不要刊登我的文章了，他可能会这样做吧。因为如果每期都刊登几篇我的文章，让读者有怨言的话就自讨没趣了，况且文章的内容都是些极其一般的东西，对日本读者来说，虽是没听过的内容，但因我文笔拙劣，所以还是渐感惭愧。不过我还会陆续写些文章。

特此通告。

四月二十九日

致 浜兄足下

丰一敬上



先月差し上げました一通の紙はお手元に届けたと思います。今度別に大したことはありませんが妹静子の訃報をお知らせします。

命を奪ったのが例のガンでした。四月二十六日午后五時ごろに逝去という電報が来た。行年七十歳です。

去年十二月初から姪からの手紙で静子がガンにかかったというので病院は体がたいへん弱っていたし、年も年で手術しても仕様がないというので家へ帰り、日本の梅干が食べたいという手紙が来て、北京にいる日本の友人や華僑から貰って二度送りました。（郵便局の厳重さはまた格別でした）のりも送って上げた。せめてものの慰みでしたが、ガンはひろがり一方だった。苦しみのうち目を閉じたことを思いますと考えた後も流れ出してしまいました。でも静子はもう、父母など親類と一緒にいろいろ生きていた親類たちは哀悼うてなりませんが人間はいくら威張っても最後は同じく死の道です。考えるとおかしくなってきます。

第十七期の「飒風」に何たらの先生のようで中島先生に却下しましたから多分もうすぐ知れません。何故かと云えば毎期に数篇も掲載して読者に文句などいわれては詰らないと思うし、内容から言うと極く一般的なもので日本の読者層に対してはきいたことのない内容ということもあまり下らない文字だから聴しく感じてまたのです。しかしまだぼつぼつ書くつもりです。

では 近来の御御中上げ致します

四月廿九日

浜 大兄

豊一 敬具

1984 年 5 月 25 日　周豊一より濱一衛宛書簡

五月五日お便り拝読しました。ありがとうございます。

肉親は一人二人と先にたって行かれ、今私と豊二だけこの世に生き残されています。豊二は寂しさそのものとお伴して暮しているので、おまけに喘息で体が弱り切っているのですから、可哀相な晩年といわなければなりません[6]。

私は呑気ながら日を暮らしてはいますが、別に善いこともありません。お酒あれば天下太平という気持です。昔の癖というのかね。今に残っているのはきつい白干兒というアルコール含量の６５％のを呑んでいます。ほかのを呑むと、何んだかアヘン呑みがタバコを呑んでいる様で、役に立たないのです。大兄の様な真面目な人でなかったから、仕方がありません。

私は已に出勤にしておりませんから、今後お便りを下さる場合は、娘のいるところの「北京市宣武门西大桥十二楼三门六一六号」の方が妥当だと思います。阜外百万庄北里（百万庄宇宙红の改名）四号楼一门二十一号も結構ですが、いつ引越してしまうかも知れませんから、矢張り宣武门西大桥が安全です。

夏になりましたけれど、時に袷などほしがります。雨は相変らず少ない。却って風の方が多いようです。

ではお大事に。

五月廿五日

濱大兄

周豊一

1984 年 5 月 25 日　周丰一致滨一卫书信

您五月五号的来信已拜读。谢谢！

亲人们一个个地离世，现在在世的只剩下我和丰二。丰二整日与孤寂相伴，又因哮喘身体极度虚弱，他的晚年只能说是非常凄惨[7]。

我虽悠闲自在，但也没什么特别值得高兴的事。对我来说,只要有酒喝就万事大吉了。积

---

[6] 魯迅（周樹人）（1881-1936）、周作人（1885-1967）、周建人（1888-1984）三兄弟のうち、周作人には妻・羽太信子との間に豊一（1912-1997）、静子、若子の三子がいた。生物学者であり、中華人民共和国で高官となった周建人には、妻・羽太芳子との間に鞠子（馬理）、豊二（1919-1992）、豊三の三子がいたが（夭逝した子を除く）、この手紙の当時は豊二のみ存命であった。

[7] 鲁迅（周树人）（1881－1936）、周作人（1885－1967）、周建人（1888－1984）三兄弟中，周作人与妻子羽太信子育有丰一（1912－1997）、静子、若子三个子女。生物学家、曾任中华人民共和国高官的周建人与妻子羽太芳子育有鞠子（马理）、丰二、丰三三个子女（除夭折之子外），丰一写此信时只有丰二还在世。

习难改，现在还在喝 65 度的老白干儿。如喝别的酒，就好像吸鸦片的人用香烟代替鸦片一样，不起作用。我不是像兄长那样自律的人，没办法。

我已经不上班了，所以今后来信请寄到我女儿那里，“北京市宣武门西大桥十二楼三门六一六号”为妥。寄到阜外百万庄北里（由百万庄宇宙红而改）四号楼一门二十一号也行，但也许什么时候会搬家，所以还是寄到宣武门西大桥更为保险。

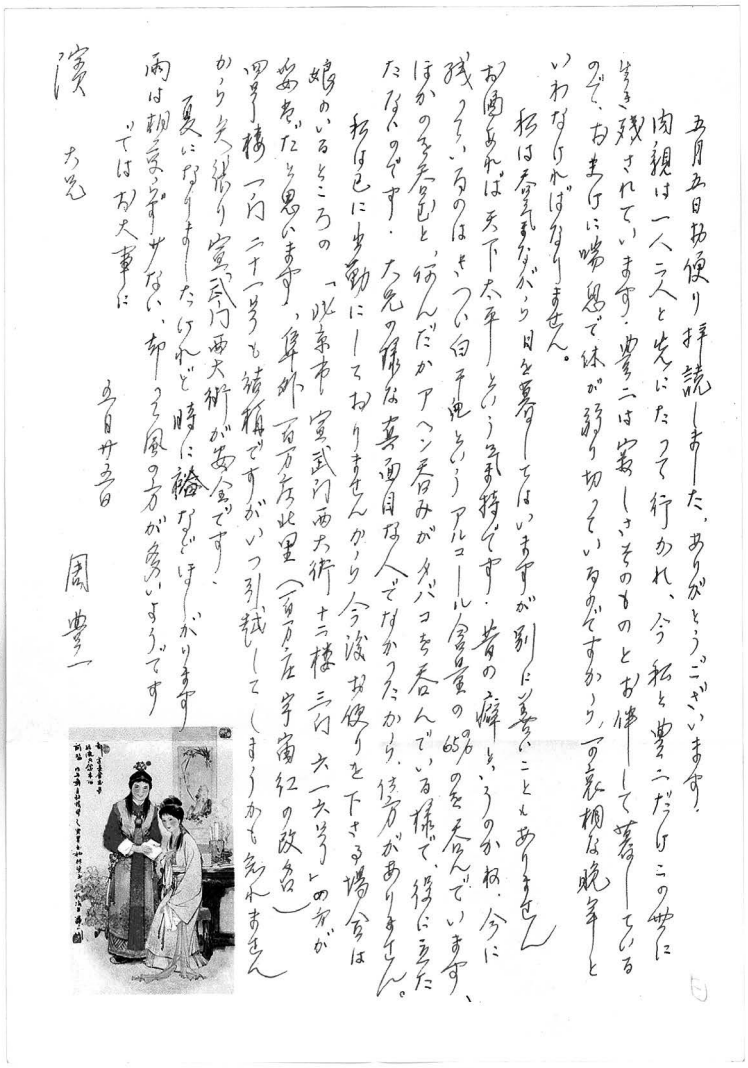
虽已入夏，但有时还是想穿件夹袄。今年雨水很少，但常刮风。

请多保重！

五月二十五日

致 浜兄足下

周丰一



五月五日お便り拝読しました。ありがとうございます。
肉親は一人二人と先にたって行かれ、今私と豊二だけこの世に生き残されています。豊二は寡しさそのものとお伴して暮らしているので、お互に喘息で体が弱り切っているのですから、この表柳な晩年といわなければなりません。
私は元気ながら日を暮らしていますが別に変ったことはありません。お酒あれば天下太平という気持です。昔の癖というのか、今に残っているのはきつい白干酒というアルコール含量の65%の奴を呑んでいます、ほかの奴を呑むと、何んだかアヘン香みが多バコを呑んでいる様で、役にたたないのです。たゞの様な真面目な人ではなかったから、仕方がありません。
私は已に少動にしており ません から今後お便りを下さる場合は嫁のいるところの「北京市宣武門西大街十二楼三門六一六号」の方が安全だと思います。阜外百万庄北里（百万庄宇宙紅の改名）四号楼一門二十一号も結構ですがいつ引越してしまうかも知れませんから矢張り宣武門西大街が安全です。
夏になりましたけれど時に袷などほかります。雨は朝夕まだ少なく、乾いた風の方が多いようです。
ではお大事に

五月廿五日　周豊一

浜　お兄

1985 年 8 月 28 日　周豊一より濱ふみ宛書簡

拝呈

突然お手紙を差し上げまして失礼申し上げ致します。

実は執友濱兄の御不幸なることに何にも悔む言葉もなく、ただぼんやりと失礼のまま暮らしてまいりまして、お允しのほどお願申し上げたく存じます。今般また中島夫人より奥様からの濱兄のお形見として頂く衣類をわたして、悲しいやら嬉しいやら何とも言えない気持で、頭を下げて頂きました。どうもありがとうございました。

最近私は「故友濱一衛氏の一二軼事」という一文を草しまして、昔時代濱兄の北京留学時期のことを思いながら書きましたもので、「飈風」に掲載して頂くつもりでございます。事情は過ぎ去って五十年にもなりますけれど、ありありと私の目に浮んで来ますのがありがたいと思っております。

私もお蔭様で老態で居ながらも今日までいきのびてまいりました。他事ながら一筆加えさせて頂きます。

ではくれぐれもお体をご注意のほどお願申し上げ致します。

八月二十八日

濱夫人へ

北京において

周豊一

1985 年 8 月 28 日　周丰一致滨芙弥书信

谨呈

突然去信打扰，还请原谅我的冒失。

对于挚友滨兄的不幸离世，未能及时致意哀悼，在恍惚和失礼中挨到今天，还望宽恕。此次收到您托中岛夫人转交的滨兄遗物——衣服，那种心情是悲还是喜，难以言表，感念不已。多谢您了!

最近我写了《故友滨一卫的一二轶事》一文，回忆昔日滨兄在北京留学时期的事情，我打算交给《飈风》杂志发表。幸运的是事情虽然已经过去五十年了，但还是历历在目。

请允许我附加一笔，托您的福，我虽然已经老态龙钟，但仍苟延残喘至今。

万望保重身体!

八月二十八日

致滨夫人

于北京

周丰一

拝呈

突然お手紙を差し上げまして失礼申し上げ致します。

実は執友濱兄の御不幸なることを何にも悔む言葉もなく、ただぼんやりと失礼のまゝ暮してまいりまして、わたくしのほどお願申し上げたく存じます、今般また中島夫人より奥様からの濱兄のお形見として頂く衣類をわたくして、嬉しいやら嬉しいやら何とも言えない気持で頭を下げて頂きました、どうもありがとうございました。

最近私は「故友濱一衛氏の一二軼事」という一文を草しまして昔時、私濱兄の北京留学時期のことを思いながら書きましたので「雁風」に掲載して頂くつもりでございます、事情は過ぎ去って五十年にもなりますけれどもありありと私の目に浮んで来ますのがありがたい気でおります。

私もお蔭様で老態でございますけれども今日まで生きのびてまいりました他事ながら一筆加えさせて頂きます。

どうぞくれぐれもお体をご愛重のほどお願申し上げ致します。

八月二十八日　北京において　周丰一

濱夫人へ

1985 年 9 月 15 日　周豊一より濱ふみ宛書簡

謹呈　　お手紙拝誦致しまして有り難うございました。

去った十年の間にとうとう濱兄と逢えずに終えたことにたいして、誠に何んとも言えぬ淋しき心地でした。人間の力で及ばぬことと知りながら、一生残念と思はねばならぬこととなりました。

お悲しみのことでございませうが、濱兄の御逝去される前後のことについて、簡単でよろしいけれど、小生にお知らせ下さればと思っております。甚だ失礼なお願で、どうか悪しからずお允のほどお願申し上げ致します。またお一人暮とのことで、さぞはお淋しいことでございませうが、名古屋に長女の方がおられるので、あちらへ暫くお住みになれば、気も晴られますでせうと思われます。

それに濱兄は小生より三つか四つ年上で、明治四十二年か三年のお生れではございませんか。私は大正元年ですけれど、七十三の老態になっております。では、たいへん我儘なことを申し上げまして失礼致しました。お体をくれぐれもご注意のほどお願致します。

九月十五日

敬具

濱ふみ様

周豊一

1985 年 9 月 15 日　周丰一致滨芙弥书信

谨呈滨芙弥女士

尊函拜读，非常感谢！

过去的十年，到底还是未能与滨兄重逢，对于此事，我一直有一种难以名状的落寞惆怅。虽然我们知道有些事情无能为力，但仍将抱憾终生。

又要惹您伤心了，不知可否请您简单告诉我滨兄过世前后的情形。这个请求颇为冒昧，还望宽恕。另外，听闻您现在一个人生活，想必一定很孤寂吧。名古屋那里有您的长女，如果能去暂住一段时间，也许可以转换一下心境。

滨兄比我年长三、四岁，应该是明治四十二、三年出生的吧。我是大正元年出生的，已是七十三的老者。我想到哪儿说到哪儿，很是失礼。请千万保重身体。

九月十五日

此致

敬意

周丰一

謹呈　お手紙拝誦致しまして有難うございました。

去った十年の間にとうとう濱先と逢えずに終えたことにたいして誠に何んとも言えぬ淋しき心地でした。人間の力で及ばぬことと知りながら、一生残念と思はねばならぬことになりました。

お悲しみのことでございませうが濱先の逝去せられる前後のことについて竹岡様でよろしいけれど私にお知らせ下されればと思っております。甚だ失礼なお願いで、どうか要ーからずお元のほどお願申しこげ祈ります。

またお一人暮らしのことでさぞはお淋しいことでございませうが名古屋に長女の方がおられるのであちらへ暫くお住みになれば気も晴られますでせう思われます。

それに濱先は四年より三つか四つ年上で明治四十三年か三年の生れでけっぎりませんか、私は大正元年ですけれどもう三の老態になっております。では　たいへん粗雑なことを申し上げまして失礼致しました。

お体もくれぐれもご自愛のほどお願祈ります

九月十五日

濱ふみ様

関豊一